鹿児島大学大学院全学横断型教育プログラム　島嶼学概論Ⅱ
中之島講義レポート

鹿児島大学大学院　農学研究科　生物生産学専攻
果樹園芸学研究室　修士１年　周　虹汝

私は今回の中之島での講義を通して、様々なことを経験させていただき、そして多くのことを学ばせてもらいました。前期の島嶼学概論Ⅰの硫黄島講義に続き、島への訪問は今回で 2 回目でした。

講義の前に、タイモの田んぼに見学しました。水を張った水田で栽培されるタイモは種イモを植えてから 2、3 年掛かって収穫できるという。水田栽培は日本本土では珍しいですが、私の出身国台湾でも同じ方法で栽培されているので、とても懐かしい感じでした。水中で栽培するため、ネズミに食べられたはずがいと思いましたが、見学の田んぼでネズミにやられたイモもありました。収穫したタイモは親戚に送るか家食用で、残念ながら販売はされていないようです。

中之島消防団の出初式を見学後、畜産を営んでいる平泉さん、I ターンの古橋さんと診療所の手塚さんに島の畜産・漁業・生活と医療についてお話を伺いました。

中之島での畜産は主に肉用牛の飼育であり、良い血統を持つ牛で、増大率は丁度いい程度です。メリットとしては放牧飼育で、ストレスは少ない。放牧のため、生産費の一部を占めている飼料運賃と飼料代はかからないという低コスト生産です。牛の排泄物を処分の手間もかからないという利点があります。デメリットとしては、放牧するため、毎日全ての牛を見えない状態です。また、中之島に獣医はいませんので、病気や怪我になる場合はどうしようもない状況です。そして、牛たちを市内で行うセリに売り出すとき、フェリーで運送するため、運賃がかかるという欠点もあります。良い環境と良質の牛であったが、島の人口は高齢化（国の高齢化率を上回る 45%）が進んでるため、飼育規模がすごく落ち込んでいる現状も知りました。

中之島での職業は主に一次産業の農畜産・漁業で、働く場所がなくて、若者が島から出たらなかなか帰ってくる事ができない現状の中に、I ターン者として中之島で漁師をしている古橋さんにお話を伺いました。講義の際に実際に使われている漁具を見せていただき、とても印象的でした。島に来て、最初はスキューバダイビングの能力を生かして素潜り漁で生活して、一日何時間海に潜り、少し休憩を取り、また海に潜るサイクルを繰り返しながら漁をしていたと聞きました。その後、船を購入し、経験がまだ浅いとき、一日何も捕れなかった日もある事もありました。仕事については自分で考えて、研究、本を読んで勉強しながら漁をやっていること、漁に出る日の睡眠は 2，3 時間しか取れないこと、休日には体のトレーニングをすることなど、漁業に対する熱心な気持ちに驚かされました。

島の医療については、遠隔医療システムを導入したが、常駐医がいないため看護師一人で島の全員の健康を見守る状態です。島では医師の宿泊施設を設置してあるが、誰も来てくれないという現状です。検診は年 1 回で、村営フェリーで行われます。そして、医師とは違って医療行為が制限されて、緊急の場合はヘリで市内の病院まで搬送しなければならない状況です。看護師の仕事の量も想像以上多くて、診療所での仕事だけでなく、体操教室、高齢者訪問、一人暮らしの方の安否確認などまでも仕事の内容で、聞くだけでも大変と感じます。

講義後、中之島小中学校に見学させていただきました。土曜日なのに、読書会、習字もあり、とても充実に感じます。子供達に自己紹介をしてもらいましたが、その中に職員の子供も含まれていました。まずは生徒の人数にびっくりしました。島の子達はとても元気で、見知らない私にも大きい声で挨拶してきて、遊んだりしました。島には高校がないため、中学校を卒業したら市内の高校に進学し、島を出なければならない状態です。ここで、どうやって少人数の離島の小中学校から多人数の都市の学校に適応するのか少し心配です。

そして、宿泊施設の開発センターの近くにあるトカラ馬の牧場も見学させていただきました。全部合わせて 20 頭で、数を管理しているため、雄馬を雌馬・子馬を隔離して飼育していました。火山ガスの影響で、放牧区の柵はすぐ劣化し、定時の修復が必要です。

十島村歴史民俗資料館で十島村に関するビデオを見て、中之島だけでなく、トカラ列島の他の島のことも勉強になりました。ヤルセ灯台に行く道は台風の影響で通行不可能になるため、今回灯台はいけませんでした。台風被害による道路の修復は材料不足と交通難の影響で遅れたりすることで、改めて島での生活の大変さを感じました。

最後になりますが、中之島の皆さん、お忙しい中ありがとうございました。島での滞在時間は短いけど、この講義を通して島に対する考え方、見方が変わったと思います。